

いよいよ最終回となりました。ここまで読んできていただいた方、いかがでしたでしょうか。「読んでますよ～」とか、「面白いですね～」とか、思いの外多くの方から声をかけていただき、それを励みにして、何とかここまで書いてこられた、と思っています。感謝するのも変なのかもしれませんが、読んできていただいたみなさん、本当にありがとうございました。

ところで、内容はどうだったんだ、ということになりますと、まったくお恥ずかしい限りでございます。私の持つわずかな知識をもとに、書籍やインターネットを見まくり、付け焼刃的に文章にしたところもあり、ホントよくなかったですね。それと、計画性のなさ、も特徴的でした。全体的な流れがまったく定まっておらず、私の気分によって、コロコロと題材が変わってました（普通の授業が思いやられます）。とはいえ、やるからにはがんばろう、と思い、

- ・ 実験、とはいかないまでも、一応私もやってみる。
- ・ 写真や画像を用い、手作り感を出す。

この2つは、意識してやってきました。実際どうだったかは分かりませんが、まあまあでしたかね。とにかく、こんな感じでした。

それでは最後に、理科とは全く関係ありませんが、ある話をして終わりにしたいと思います。

先日、食料品の買い物のため、車に乗ってお店に出かけました。その時、「歌でも聴こっかな」と思い、カーオーディオのボタンを、ぽちっと押しました。私のは、USBに保存された曲を聞くというタイプで、私は懐メロが好きなので、昔の曲がそのUSBには多く保存されているのです。そして、この時にランダム再生で流れてきたのが、和田アキ子さんの「あの鐘を鳴らすのはあなた」でした。知らない方もいらっしゃると思うので、以下でちょっと紹介を。

◎ 歌詞の内容、または世界観の、私なりの解釈

[現状の確認]

- ・ 町は眠りの中にあり、しかも、(前川清の「東京砂漠」ではないけど)、砂漠の中だ。
- ・ そんな町に暮らす「人」は、皆、悩んでおり、しかも孤独だ。

そんな現状だからこそなのか、「あの鐘を鳴らすのは、あなただよ」と歌っています。

[ここで言う『あなた』の特徴]

- ・ 希望の匂いがする (たとえつまずいても、さわやかな希望の匂いがする、らしい)
- ・ 愛し合う心に戻してくれる (「あなた」といると、自然とそう思える、らしい)

ここで、当然疑問に挙がってくるのが、私としては、下の3つです。

- ① 「あなた」って、一体誰なんだ？
- ② 「あの鐘」は、一体どこにあるの？
- ③ そもそも「鐘」って何？（しかも「あの」ってなんだよ）。

皆さん、どうですか？歌の「現状」が、今この世の中の「現状」に、似ていると思いませんか？私はこの曲を聴いて、「これ今じゃん」と、一人車の中で思っていました。

仮にそうだとし、話を進めます。まずは「鐘」問題です。「鐘」って、何？どこ？

ここで一つ、思い出したことがあります。

宮部みゆきさんの小説に「龍は眠る」というのがあります。その小説で、ある登場人物が、「人は誰も、一頭の龍を、身体の中に飼っている」みたいなことを言います。「底知れない力を秘めた、不可思議な姿の龍」を。

仮にそうだとするならば、身体の中に「龍」がいるぐらいですから、「鐘」があったって、おかしくない、と思うのです。ということで、「鐘は、私たち一人一人の身体の中にある」と仮定してみよう、と思います。

そうしたら、ですよ、それを鳴らせるのは、間接的には誰でもいけるでしょうが、直接的には「自分」でしか、ありえません。

もしそうなのだとするならば、ですよ、孤独に満ち溢れた町に「あの鐘」を鳴らせるのは、「自分」であり、そんな「自分」は、人から、「希望の匂いがする」と思いを寄せられ、「愛しあう心が戻ってきたよ」と、喜ばれる存在である、ということになります。

かなり強引な進め方ですが、もう少し続けてみます。

こういう流れになると、この「自分」というのが「私」ってことになり、そうすると「ちゅーことは、俺が鐘を鳴らすってことか、よっしゃーやったるぞー、せーの、ご〜ん」みたいに、つい特別なことをしよとってしまう。

が、ここで、先日新聞に載っていた、ある記事を紹介しようと思います。

この記事は4月末から5月にかけて載っていた、一橋大学の教授の方が、「コロナ時代の仕事論」と題して著した、上・中・下、3回に渡る連載物です。そこでこの先生は、「世の中にはコントロールできないことがある。思い通りにいかななくても、『ニヤリ』と笑って受け止めて、他人を気にせず自分と比べず、いいときも悪いときも、自らの仕事と生活にきちんと向き合うべし」という内容だと、私は解釈しました。

以上のことを踏まえると、「自分のできる範囲のことを、淡々とやればいいのか」と思うのです。そうすることが「鐘」を鳴らすことになり、「あなたに逢えてよかったわ」みたいに、感謝されることに通じるのだと思います。

これで、私の書きたいことは終わりです。最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。それでは皆さん、さようなら。



鐘が、いや違う違う、曲が入った USB です



かなり読み込んで「龍は眠る」です

コロナ時代の仕事論
一橋大学教授 楠木建氏

和田英「富岡日記」とい
る名著がある。明治6年、15
歳で富岡製糸場の伝習工女
となった著者が、当時の富
岡での生活と思索と行動を
約30年後に回想した記録。
彼女は長野県松代出身で、
武家の娘として筋金入りの
教育を受けた女性だった。
明治維新の真っただ中、
伝習工女には製糸業の指導
者としての役割が期待され
ていた。「天下のおため」
を自覚した英は耻（まなじ
り）を決して松代から富岡
に。国を背負い発展に力を
尽くすという気迫に満ち満
ちている。新型コロナウイ
ルスで「未曾有の危機」と
大騒ぎだが、富岡日記を読
むと我々がどれだけ豊かで
平和な時代を生きているか
と再認識させられる。

そして、この10年ほどよく
使われるようになったフ
リーズに「イラストする」
がある。いまの時代を悪い
意味で象徴する言葉だ。何
を象徴しているかという
「大人の幼児化」。当時の
和田英はいまなら子どもだ
が、現代の大人よりずっと
大人である。

幼児性の中身には以下の
3つがある。1つ目は世の
中に対する基本的な構えの
問題だ。子どもは身の回り
のことがすべて自分の思い
通りになるという前提で生
きる。だが仕事で大切な
は「世の中は自分の思い通
りにならない」という前提
だ。

本来は独立した個人の
「好き嫌い」の問題を「良
し」にすり替えてわいわい
あいつ。これが幼児性の2
つ目だ。「好き嫌い」にすぎ
ないことを勝手に良しあし
の問題に翻訳するから、妙
な批判や意見を言いたくな
る。第3に大人の子どもの
他人のことに関心を持ちず
る。第3に大人の子どもの
他人のことに関心がある
というより、自分の不満や
不足感の埋め合わせという
面が大きいのではないか。

「出る杭（へら）は打たれ
る」世の中（よこ）は曲（まが）む
ものだ。

あるが、出るとか出すぎる
というのは周囲と比較して
の差分を問題にしている。
比較してばかりの人は嫉妬
にさいなまれる。子どもが
「イラストする」のも嫉妬
であることが少なくない。

人はそれぞれ自分の価値
基準で生きている。人は人
自分は自分。ほとんどの場
合、比較には意味がない。
仕事ができる人ほど出来合
いの物差しで他人と自分を
比較しない。本当にスゴイ
人は他人との差分で威張ら
ない、自分のダメなところ
弱いところを自覚し、自分
の強みはあくまでも条件つ
きで全面的に優れているわ
けではないことをわきまえ
ている。だから威張らない。
自分一人ですべてに秀で
る必要はない。世の中には
いろいろな得手不得手の人
がいる。そうした人々の相
互補完的な関係が仕事を成
り立たせている。それが社
会の良いところだ。他人を
気にせず自分と比べず、い
いと苦も悪いときも自らの
仕事と生活にきちんと向き
合いつ。それが大人という
ものだ。

他人と自分を比べない

紹介した新聞記事です。難しいこと書いてありますね。